

霜田史光の作品発掘と教材化

Searching for Shimoda Shiko's works in several magazines,
and editing his works for use in the junior high school

プロジェクト代表者 竹長吉正（教育学部教授）

Research representative: Yoshimasa Takenaga (Professor, Faculty
of Education)

1. 日本近代詩研究の未開拓分野を切り開く

霜田史光の『流れの秋』（大正8年5月）は日本近代詩史の中で孤高の榮譽を担う詩集である。霜田史光はこの詩集に50篇の詩を収録しているが、この後、民衆芸術運動に邁進し、新民謡・童謡・童話・戯曲・剣客小説などに手を染めていく。つまり、彼は一部の高踏的な知識人や文学青年を相手にした「文学」から手を引き、名もない庶民や大衆のために彼らの「癒し」となるような文学を追い求めていったのである。

したがって、史光の詩業として巷間に知られているのは、『流れの秋』のみと言っても過言でない。しかし、史光には『流れの秋』以外にも多くの詩作品がある。各雑誌に発表されたそれらを集め、詩集未収録詩篇として刊行することの意義は大きい。本研究はまず、このことを行った。

また、これまで日本の近代詩研究においては既に評価の定まった詩人（萩原朔太郎・室生犀星・北原白秋・高村光太郎など）のみが取り上げられるという傾向があり、そうした怠惰な研究姿勢に一石を投じる意味もある。

私たちが刊行した『霜田史光作品集』（注①）は日本近代詩研究の未開拓分野を切り開く貴重な資料集とすることができる。

2. 日本近代詩研究に必要な詩論を発掘した

詩人にとって、詩作品と詩論は表裏一体ともいえるべき緊密な関係にある。よって、詩人研究においては詩論を看過することができない。今回刊行した『霜田史光作品集』には20篇の詩論を収録した。大正8年から昭和4年までかなり長い期間にわたっており、これらの詩論を読むと当時の詩壇状況がつぶさに了解できるとともに、霜田史光がいかにか「詩語としての日本語」の問題と真摯に格闘してきたかが読み取れる（注②）。これらの詩論を参照することで日本近代詩（特に大正期の詩）研究は一段と進展するものと判断する。

3. 作品集の刊行から作品の教材化へ

霜田史光作品集の仕事（編纂・校訂）は完結したわけではない。戯曲・剣客小説・随筆などを収録し刊行することが残っている。しかし、現時点においてある程度、輪郭の明らかになったこの文学者の作品の、教育への活用を意識せざるを得ない。すなわち、霜田史光作品の教材化である。筆者が担当する大学のゼミや授業で、しばしば史光作品を取り上げ、その教材可能性を探究中である。

目下のところ、詩・童話については小学高学年～中学生、詩論については高校生で教材として使用可能との研究結果を得ている（注③）。

さらに、一般成人に対するアンケート調査を行い、史光作品の評価を測定した（注④）。ア

アンケートの回答を集計したが、おおむね、作品については「すぐれている」「興味深い」「ユニーク」など好意的な評価が多かった。「埼玉にこんなすばらしい文学者がいたとは知らなかった。」などという声も多かった。こうしたアンケート回答に見られる期待に答えるべく、さらに気を引き締めて研究を続けていく所存である。

注

- ① 竹長吉正編著『霜田史光作品集』（2005年12月刊、B5判124ページ）。史光の詩集未収録詩篇20篇と代表的詩論20篇を収む。
- ② 前出①『霜田史光作品集』所収の「複雑の単純化」「詩語としての日本語」「新詩講話（一）～（三）」などを参照。
- ③ 埼玉大学生の作成した学習指導案が多数ある。例えば詩では「人生送迎」「朝の鐘」「言葉流し」「吹雪の夜」、童話では「夢の国」「偽浦島」「少年絵師」、詩論では「新詩講話」などに関するもの。
- ④ 2006年1月、さいたま市立大宮図書館で実施した。アンケート用紙配布数115、回収数34、回収率29.6%